

現代語における「鼻白む」の用法

中野伸彦

The usage of "Hanajiromu" in Modern Japanese

NAKANANO Nobuhiko

(Received September 29, 2017)

一 はじめに

現代の国語辞典で、「鼻白む」を引くと、多くの国語辞典では、次のように「気おくれする」のような意味と、「興ざめする」のような意味とが挙げられている。(例文は省略して引用する。)¹⁾

①気おくれした顔つきをする。②興ざめする。(三省堂現代新国語辞典第五版)

①気後れした顔をする。おじける。②興ざめた顔をする。(明鏡国語辞典第二版)

気おくれした顔つきをする。興ざめた顔つきをする。(新選国語辞典第九版)

しかし、現代の「鼻白む」の用例を見ると、必ずしも、この二つの用法におさまってはいない。以下、本稿では、採取した用例をもとに、現代語における「鼻白む」の用法の広がりについて見ていく。

二 「気おくれする」

まず、「気おくれする」に当たる用例から見ていく。たじろいだり、恥じ入ったりして、気持ちが内向きに引ける状況で用いられる例である。

1 「もう、いい加減にしたら」京一が呆れ顔で言った。「露天風呂でも呑んでたんだろ。ほんと、なにしにきたんだよ」

しかし、空美は杯を口へ運ぶのを止めようとしな。 (略)

ぐっとあけた杯を、叩き付けるようにテーブルに置くと、空美は言った。「あんたらこそ、いい加減にしなさいよ」

「なにがだよ？」
「本だよ。ふたりして、さっきから黙って本ばかり読んで、陰気臭くて、全然面白くないよ。あんたらこそ、なにしにきたんだって訊きたいよ」

そう言われて、いささか鼻白む京一。

「い、いや、こういう静かな環境に来ると、本がよく読めるんだよ。温泉で読書するのは、別におかしいことじゃないよ」(山口雅也 続・垂里冨子のお見合いと推理、講談社文庫40・8)

2 「木を伐るって、それはもう決まったことなんですか」

改めて、作業員の背中に尋ねた。作業員は手を止めず、「そのはずですよ」と振り向かないまま答える。決して邪険に扱われたわけではな

いが、それでももうこれ以上邪魔はしないでくれという心の声が聞こえてくるような態度だった。ハナは鼻白み、続けて話しかけることができな

かった。(貫井徳郎 乱反射、朝日文庫51・5)

3 「それで、博士にお訊きしたいのですが」
「はい、なんですか？」
「今回の集いで、サレナが他の参加者と、事前に面識があった可能性はあ

りませんか」(略)

「いえ、それはないと思います」

博士は事もなげにそう答えた。まさかこうまできっぱり否定されるとは思わず、俺はいささか鼻白む。

「……どうしてそこまではっきり言えるんです？」

「皆さんのことは、事前に調べさせてもらってますからね」(久住四季

星読島に星は流れた、創元推理文庫296・16)

4 「彼はずっと前から智久君のライバルと言われてるんだよ」

中山のその言葉に、植島はやや鼻白んだように、

「今ではすっかり水をあげられちゃいましたけどね。何しろ、相手は押しも押されぬ本因坊ですから」(竹本健治 妖霧の舌、光文社文庫17・

5)

5 「熊さんだって、長江くんを捕まえて自分の身体を嗅ぎながら、『この匂

いを肴に飲めるな』って絡んでたじゃない」

「えっ？」

熊井が鼻白む。「そんなこと、言ったっけ」(石持浅海 Rのつく月に

は気をつけよう、祥伝社文庫246・4)

のように、外からの言葉に圧せられて、たじろいたり、恥じ入ったりする場合の用例が多いが、

6 遠垣内将司？

「誰だっけ」

「折木、あんたはどこまで！ 壁新聞部の部長よ」

ああ、あの。思い出した。思い出して俺は、鼻白む。

遠垣内は以前にちよつとした縁があった三年生だ。詳細は省くが、俺は彼が隠しておきたいと思った弱みを利用して、ささやかとは思うが脅迫をしたのだ。あまりいい思い出ではない。入須はそんな俺の表情を読んだようだ。

「大丈夫、遠垣内は君を悪く思っていない」(米澤穂信 愚者のエンド

ロール、角川文庫61・11)

のように、自ら省みて、恥じ入る場合に用いられた例もある。

この「気おくれする」に当たる用法が古くからのものと考えられ、次の『源氏物語』の用例もこれに当たる。(2)

宰相中将、「春といふ文字賜れり」とのたまふ声さへ、例の、人にことな

り。次に頭中将、人の目移しもただならずおぼゆべかめれど、いとめやすくもてしづめて、声づかひなどものものしくすぐれたり。さての人々は、みな臆しがちにはなじろめる多かり。(源氏物語 花宴、新編日本古典文学全集①353・12)

なお、国語辞典では、さきに引用したように「気おくれた顔つきをする」

「気後れた顔をする」のように、「顔つき」に関わるものとして説明するものが多い(ただし、『明鏡国語辞典』は、「おじける」という説明も、あわせてあげている)。

たしかに、6の例(「鼻白む」の後に、「そんな俺の表情を読んだようだ」とある)や次の7の例のように、顔つきに表れていることを述べるのに用いた例もあるが、

7 「びいくん」千波くんは、サラリとぼくを見た。「残念ながらびいくんも間違っています」(略)

鼻白むぼくの顔を上目遣いに見て(高田崇史 試験に出るパズル、講談社ノベルス156上5)

一方、

8 「そろそろいいですか。聞き込みに出たいんで」

一方的にやり取りの終わりを宣言した。奥村は鼻白んだらしく、わずかに言葉に詰まる。(貫井徳郎 後悔と真実の色、幻冬舎文庫318・6)

9 「犯罪者は犯罪者だ。真面目に生きる人たちが、弱いものを利用して、楽して得していたあなたを白い眼で見るとうぜんだ」

冷え冷えとした声で言い切ったのは小坂だった。

小坂の言うことも一理あると思う。でもなあ、俺としては若林の意見を支持したい。確かにずるをしたとは思いますが、捕まっちゃったんだし、罰を受けて罪を償ったのだから、それでいいんじゃないかなろうか。

「あなたは法の下に罪をきちん償われた。それ以上の何かを第三者に求められたりされたりするのは、私はおかしいと思いますよ。誰にもそんな権利はないし、それが許されるのであるなら、法がある意味はなくなってしまう。若林さん、先を続けて下さい」

静かな声で仁藤が言った。それには小坂も鼻白んだようだ。仁藤は嫌いだ、これには同意。

若林は仁藤の意見に助けられたのか、また話し出した。(日月恩 鎮火報、講談社文庫304・11)

のように、「鼻白む」に「らしい」や「ようだ」がついて、内面の状態を推測して言っていると見られる例もあり、少なくとも現代では、顔つきのことに限定されているわけではない。⁽³⁾

三 「興ざめする」

次に、「興ざめする」に当たる用例を見ていく。興味をひかれていたこと・意欲が盛り上がりつつあったことに対して、その興味や意欲の盛り上がりや失う事態に用いられた例である。

10 木村は神奈川体育館でこのマックと二連戦二連勝してみせる。両日とも三千人の入りで、観衆は大いに沸いた。

これで、団体として何とかやっていける目途がつき始めた。

しかし、信じられないことが起こった――。

ゴージャス・マックが宝石強盗をやったのだ。(略)

その夜、マックはナイトクラブ『ラテンクオーター』で酒を飲んでいるところを七人の私服警官に逮捕され、府中刑務所で六年服役することになる。この事件は大きく報道され、マックがアマレスチャンピオンでもプロレスラーでもなく、ただの不良外国人だとわかり、プロレスファンは鼻白み、木村はまた熊本に戻って出直しとなった。(増田俊也 木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか 下、新潮文庫431・6)

11 「ちょっと待って下さい、島田さん」と、それを三田村が遮った。

「あなたが組み立てられた論理には、いくつか穴があると僕は思うんですがね」(略)

島田は、渋い顔で髪を撫で上げた。

「確かに、そういう可能性もあるか。しかし、どうもね、やっぱりあの墜落事件は殺人だったと考える方がびつたりくるんだなあ。一番びつたりくる」

「わりといい加減なんですな」

三田村は鼻白んだように肩をすくめた。

(綾辻行人 水車館の殺人、講談社文庫121・17) * 島田の推理に興味を持って聞いていた三田村が、自分の指摘に対する島田のいい加減な返答に、島田の推理への興味を失う場面。

12 「家如きがそんなに大切ですか」

「大切や。アンタにや理解できへんかもしれんけど、ウチは龍樹を守るためなら何でもできんねん。ぐだぐだぬかしてると一族郎党皆呪うで」

「やれるものならどうぞ」

真顔でそう返す達也に落花はやや鼻白んだ表情でかぶりを振った。

「やめとくわ。アンタの家にそんなことしても面倒なだけや。それに

……」(円居挽 丸太町ルヴォワール、講談社文庫452・1)

「興ざめする」に当たる場合についても、「気おくれする」に当たる場合と同様、「興ざめた顔をする」「興ざめた顔つきをする」のように、顔つきのことを言うとしている国語辞典が多いが、11の例のように、「肩をすくめる」という動作と結びつけて推測されている例もあり、これも、顔つきのことに限定されているわけではない。

四 「気おくれする」「興ざめする」以外①

以上、「気おくれする」「興ざめする」に当たる例を見てきたが、以下は、それ以外の「鼻白む」の用例について見ていく。

「気おくれする」「興ざめする」以外で、比較的多くの用例が見られるのは、冷静さや抑制を欠く行為・やりすぎな行為に接して、ついていけないという思いを持って用いられた例である。これも、「気おくれする」と同様、気持ち的に引けてしまう場合ではあるが、たじろいだり、恥じ入ったりするということなく、呆れて、ついていけないさを感じるという意味で、引けるものである。

13 地区大会進出の勢いに乗って、秋の定演は、これまでになかったような出来にしようねと(毎年同じことを言っているのだが) 水野先生、異様に盛り上がる。どうやって費用を工面したのか、第三部のポップス演奏用に、パール社製のドラムセットを購入することに成功した。連打用のタムタムまでオプションに付けて。(略)

さらに水野先生、後援会に呼びかけ、ポップス演奏用のステージ衣装まで用意させた。(略) こちらが鼻白むほど張り切った。(西澤保彦 黄金色の祈り、中公文庫93・10)

14 歌舞伎座建替えを巡っても、歌舞伎座取り壊し即歌舞伎滅亡と飛躍し、強硬な反対を唱える人まで現れたのには、いささか鼻白んだ。(犬丸治 市川海老蔵、岩波現代文庫245・4)

15 一八は樋口を鼻白ませるまで、鯨飲泥酔し、中身のずり落ちた土産の折詰をぶら下げて師匠の家に帰り、自室に倒れこんで眠る。(平岡正明 志

人生的、文楽的、講談社文庫77・6)

16 関口存男が新しい町の最初の住人一人になったのは、時代の理念に共感したせいだろうか。(略)「文化村」といった大正スノビズムの産物のような命名には、いささか鼻白んだかもしれないが、時代思潮に敏感でなかったはずはない。(池内紀 ことばの哲学、青土社126・12)

17 元はといえば芝居好きの熱意が昂じてのことなのだが、いささか現実離れた書生論に鼻白んだ人が多かった。「鑑踏張り鞍壺に立上り、大音声に演劇改革談を説かれしは学海先生只一騎」(『竹の屋劇評集』)と饗庭篁村に冷やかされたように、援軍が現れないままさすがの先生も敬して遠ざけられる憂き目にあった。(矢内賢二 空飛ぶ五代目菊五郎、白水社125・12)

『三省堂国語辞典』第七版の「鼻白む」の語釈に「①しらけて、ふきげんになる。「さざなせりふに」」とあるのは、このような用例のことを指しているのかもしれないが、必ずしも「しらけて」いるわけではないし、「ふきげん」というのとも、やや異なっている。

もう一つ、「気おくれする」「興ざめる」以外で、比較的多くの用例が見られるのは、してほしくないような態度をとられて反感を抱く場合に用いられる例である。その行為に対して、よく思っていない点では、前に述べた、「冷静さや抑制を欠く行為・やりすぎな行為に接して、ついていけない」という思いを持つ際に用いられた例」と似ているが、気持ち的に引けているというよりは、まともに反感を抱くという反応のあり方の面で異なっている。

『大辞林』第三版に「①批判を受けたら、氣勢をそがれたりして、気分を害する。また、興ざめる。」とある前半部分は、今取り上げている例について述べたもののようにも思われるが、

18 楠原は、その景品をぜんぶ一律に、一枚三百円也の「夏休みジャンボ宝くじ」にするといひ張ったのである。

「宝くじがあつてもいいけどさ、贈答品以外の景品が薄っぺらな紙切ればかりじゃ、面白みがなくないか？」

中藤が異を唱えたが、楠原は取り合わなかった。

「面白みがなくない、って。じゃあ、代わりに三百円でなにが買えるんですか？」

「知らんけどさ。誰か女の子に買いに行かせりゃ、色々あるんじゃないの？」

「そんな要りもしないもの、貰ったってゴミになるだけですよ。ジャンボ宝くじなら、一等前後賞合わせて三億円ですよ、三億円。どうせゴミになるなら、そっちの方がずっと夢があるじゃないですか」(略)

「でも、三億円なんて当たりつこないからなあ」
「文句が出たら、私が一枚三百円で買い取りますよ。それならいいんでしょう？ だいたい、中藤さん。ぜんぶ君に任す、っていったじゃないですか」

争うほどのことではないから引き下がったものの、中藤は楠原の氣勢に鼻白んだ。

先輩の顔を立てないヤツだ。こういう輩は、上司にも平気で楯突くに違いない。楠原が何度も転職をした理由の一端が分かる気がした。(深木章子 衣更月家の一族、講談社文庫118・4)

のように「批判を受けた」場合、

19 甘えた声音で、母が言う。
「聞いてよ。大島くんたらねえ、『美帆子ちゃん、指輪のサイズは何号』、だなんて訊いてくるのよ。これってやっぱり、そういうことよね。ねえ小柚子、あんただってそう思うわよねえ」

「え、さあ、どうかな」
「どうかなって、あんた」一瞬母は鼻白んだが、「ああそうか、うん、あんたまだ高校生だもんね、こんなの、子どもにはむずかしい話よねえ」

(榎木理宇 赤と白、集英社文庫155・13) *母(美帆子)が恋人(大島)に指輪のサイズを訊かれたことを、喜んで娘(小柚子)に言うが、
ぶい反応に出会う場面。

のように「氣勢をそがれた」場合もあるが、それ以外にも、次のように、いろいろなしてほしくないことをされた場合の例がある。

20 玉藻は答えない。

聞いているのかいなのか、そもそもこの時点に至って煙々羅のことを認識さえしていないのか、この状況において余所見さえしていた。

煙々羅はそんな玉藻の態度に鼻白んだように、
「おっと。シカトだよ」

と、息をつく。(西尾維新 零崎人識の人間関係 匂宮出夢との関係、講談社ノベルス75上10)

21 堂島健吾は、ありがたいことに、すぐに出てくれた。

「……何だ」

「あ、健吾？ 用がなければすぐ来てほしいんだけど」

「用はあるぞ」

「用があってもすぐきてほしいんだけど」

もともと不機嫌だった声が、あからさまに鼻白んだ。

『ふざけるな』（米澤穂信 夏季限定トロピカルパフェ事件、創元推理文庫145・16）

22 「それで、こっちの資料は大丈夫か」

冷やかすように言うと、里志はそれをそのまま撥ね返してきた。

「ホータローこそどうだい？ 慣れない仕事だろうに、いいネタはあったかい？」

訊いたのは俺だと鼻白みながら、俺は答える。

「ああ、まあな」（米澤穂信 氷菓、角川文庫129・3）

23 「俺にこのバイトをやらせてください。ていうか、なんで相応しくないんですか？」

ユウキさんは求人内容にちらりと目を落とした。（略）

「……」

答える代わりに、奨学係の女は小さなため息をついた。これだから女は

困る、と高口は鼻白む。ろくな、論理的理由もなく、「ただ何となく嫌だ

から」だけで人の邪魔をするのだ。（乾ルカ メグル、創元推理文庫123・

10）

24 「冗談だろう、グリフィン君？」

「いや、嘘いつわりのない真実だ。」

「まじめな顔でからかうのは、よしてくれ。」オストアンデルは鼻白んだ

ようにつつけんどんな口調で言った。（法月綸太郎 怪盗グリフィン、絶

体絶命、講談社337・3）

また、右に挙げた例のように、単に「気分を害する」だけでなく、反感を

もって、相手とわたりあおうという気概が見られる場合に「鼻白む」は使われ

ている（19・20・21・24のように実際に反感を口にする場合も、18・22・23の

ように、口には出さずに心の中で思うだけの場合もあるが）。なお、『日本国

語大辞典』第二版に「②興ざめがある。不愉快な気持ちになる。」と、「不

愉快な気持ちになる」という説明がある。この「不愉快な気持ちになる」も、

はつきりしないが、今述べている用法について述べているようにも見える。た

だし、同様に、「不愉快な気持ちになる」にとどまるものではない。

五 「気おくれする」「興ざめする」以外②

前節で挙げた二つが、「気おくれする」「興ざめする」以外に用いられる

「鼻白む」の主な例だが、他に、用例は少ないが、次のような例も見られる。

まず、一つは、選択肢があつて、一つに決められず、迷う様に用いられる例

である。

25 「君は、ずいぶん、突拍子もないことを考えるんだねえ」

「別に、突拍子もないことだとは、思いませんが」

「いや。驚くべき考えだよ。たいしたものだよ。君」

「――」

吉牟田刑事は、鼻白み、黙ってしまった。明智の言葉が、賞めているの

か、皮肉なのかわからなかったからである。（西村京太郎 名探偵が多す

ぎる、講談社文庫92・7）

右は、少し古い例だが（昭和四十七年）、現在のインターネット上の、次の

ような例もある。

26 直販PCは安いけど、ラインアップがたくさんあつて鼻白んでしまう

……。そんなあなたに送る、ノートPC選びのお手軽指南。

(<http://www.immedia.co.jp/pouser/articles/0802/29/news032.html>)

もう一つは、次のような例である。意味がとらえにくいところがあるが、優

位に立って、相手を見下すような態度に用いられている。

27 そう即答するエレ・ノイの泰然とした態度に、ケンは気づいたように息

を呑む。

「この都市は、eシティは、eNYは、eニューロは」

ケンはこの都市の中央に座する者を見る。

その玉座に座る者を。

ようやくわかったのか、とエレ・ノイは鼻白む。

（王城夕紀 ノット・ワンダフル・ワールズ、『伊藤計劃トリビュート』

ハヤカワ文庫454・3）

28 「――つまり、あれは殺人ではなく事故だった、そう言いたいわけか」

カスランは、一瞬の間のあと、鼻白んだように言い放った。

「可能性としては否定しないが、蓋然性は低いと言わざるを得ないだろ」

反論はできなかった。斉木がとっさに考えた可能性は、可能性であつて

現実的ではなかった。(梓崎優 砂漠を走る船の道、『叫びと祈り』創元推理文庫51・5)

六 各用法の関係

以上、「気おくれする」「興ざめする」以外の用法として、四つの用法を挙げてきた。

A 冷静さや抑制を欠く行為・やりすぎな行為に接して、ついていけないという思いを持つ

B してほしくないような態度をとられて反感を抱く

C 選択肢があつて、一つに決められず、迷う

D 優位に立つて、相手を見下すような態度をとる

最初の意味と考えられる「気おくれする」から見ると、A・Cは、気持ち的に引けるといふ点を受け継いでいると言えよう(恥じ入ったり、たじろいだりするのではなく、ついていけないという思いであつたり(A)、一つに決め難いという思いであつたり(C)という違いはある。なお、「興ざめする」も、気持ち的に引けるといふ点を受け継いでいると言える)。B・Dは、Aの場合にある、相手に対する否定的な思いという点で、Aと共通している(Aは、それについていけないという引き気味の態度を表す、Bはまともに反感を抱く、Dは見下すような態度をとるといふ違いはある)。

関連はしながらも、多様な用法があり、文脈上どれに当たるか分かりやすいものもあるが、判断がむずかしい用例も少なくない。次の例も、「気おくれした」のか、「してほしくないような態度をとられて反感を抱いた」のか、どちらとも決めにくい。

29 「お前のホームページ、あれはおれがやめろと言つた個人批判そのものじゃないか。たとえ個人名は伏せてあつても、隠してあるのはそれだけだろ。わかる人にはすぐわかるように書いたのはどうしてだ。お前なら、もう少し配慮した文章が書けるはずだろうが」

「配慮なんてしたくなかつたんです」

開き直つたわけではなく、むしろあまり考えもせずに事実を答えた。しかしそんな態度が、海老沢を鼻白ませたようだ。わずかに仰げ反ると、しばし目を泳がせてからもう一度問いかけてくる。

「物事にはやり方があることくらい、お前だつてわかつてるだろう。(略)問題になつてもいいから、世間の人に見てもらいたかつたのか」

(貫井徳郎 乱反射、朝日文庫582・4)

30 長身にサンド・カラーのスーツを着こなした三田村が、颯爽と歩み寄つて、紀一に握手の手を差し出した。

「風邪をひかれたと聞いていましたが、いかがですか」

「大したことはない」

紀一は外科医の手を無視して、

「父上はお元気ですか」

「おかげさまで」

三田村は鼻白む素振りもなく、差し出した手を下ろした。(綾辻行人 水車館の殺人、講談社文庫73・16)

「鼻白む」に限ったことではないであろうが、「鼻白む」の用例に出会った時、どのように読み取ればいいのか、なかなか困難な状況に現在あるように思われる。

七 「鼻白む」の読み方

最後に、「鼻白む」の読み方について、述べておく。現代の国語辞典では「はなじろむ」として挙げられ、これまで引いた例にもあつたように、ふりがながつけられる場合も、多く、「はなじろむ」である。「鼻白む」はハナジロムと読む。のように書かれているものもある(神田龍之介 揺れる日本語どっち? 辞典、小学館97下5) (平成二十年)。

ただし、「はなじらむ」といふふりがなをつけた例も少ないがある。31 「ところで、大和の実力はどんなものだ?」

撫子は一瞬鼻白んだ様子で達也の顔を見つめる。

「大和? ああ……:少なくとも今の私よりはずつと手強い相手だと思つてくれた方がいいわ」(円居挽 丸太町ルヴォワール、講談社文庫163・8)

また、『日本国語大辞典』第二版には「はなしらむ」の項をたてて、次の例を挙げている。

32 いと鼻しらむべきさがしらなり(上田秋成 藤篋冊子、上田秋成全集第十卷(中央公論社)213・7)

他にも、次のような例もあり、「はなじ(し)らむ」の読みを一概には否定できないものと思われる。

33 慶一は稍鼻白んであだが(三上於菟吉 蛇人、『太陽』第三十一卷第九号153上11)

八 おわりに

以上、現代語の「鼻白む」の用法について述べてきた。

これらの意味の発生の順序がどのようであるかなど、問題は残るが、本稿では現状における用法の幅を確認したところである。(4)

注

(1) 以下、引用に当たっては、ふりがなを省略するなど改変したところがある。ただし、「鼻白む」にふりがながついていないものについては、全て残している。

(2) 国語辞典によっては、現在でも、

気おくれした顔つきをする。(広辞苑第六版)

のように、「気おくれする」の意味のみを挙げているものもある。また、現在は、そうではないが、少し前まで、「気おくれする」の意味のみを挙げていたものもある。たとえば、『学研現代新国語辞典』の第三版(平成十四年)では「気おくれした顔つきをする。」であったが、第四版(平成二十一年)から「気おくれした顔つきをする。また、興ざめする。」となっている。

(3) 『HANAJIROMI-MU ハナジロム 赧 i.v. To blush: turn red in the face』(和

英語林集成 第三版、講談社学術文庫)とあったり、「赧顔て」(曲亭馬琴 皿

皿郷談 卷之五上、馬琴中編読本集成 第十六卷(汲古書院)9オ6)とあった

り、かつては顔つきのことを言っていたと思われるところはある。

(4) 『日本国語大辞典』第二版には「②興ざめがする。不愉快な気持ちになる。」の例として、次の例を挙げているが、どちらも「気おくれする」の用法とみることのできる例である。

34 その頃の習ひとて、上人も忍んで通つて居る児が、五條あたりに在つた。

(略) ほとゝぎすが、鳴きしきる夕暮、上人は興を、卯の花ほのじろうにほへる垣根のほとりに寄せて、久しく打ち絶えたる児を訪うたことがあつた。

児は上人の顔を見ると「夏衣」と云つたまゝ、面を伏せて、とみには物も云はなかつた。上人も、鼻じろみておはしたが、そのまゝ席を立てて、帰らうとした。(菊池寛 頸縊り上人、『恩讐の彼方に 忠直卿行状記 他八

篇』、岩波文庫207・8) (大正十一年)

35 「お前の小間使にもなるような女がいいのだから、なるべく素人のすれない娘がいい」とは注文してやったものの、倫が自分の言いつけを守って熱心に探し出してきた女が想像以上にかたい蕾なのに白川はむしろ鼻じろんだ。

(円地文子 女坂、新潮日本文学『円地文子集』22上5) (昭和二十四)

三十二年)

また、『大辞林』第三版には「①批判を受けたり、氣勢をそがれたりして、気分を害する。また、興ざめする。」の例として、次の例を挙げているが、これも「気おくれする」の用法として解釈できる例である。

36 果せる哉、件の組は此勝負に逢き大敗を取りて、人も無げなる紳士も有繫に鼻白み、美き人は顔を赧めて、座にも堪ふべからざるばかりの面皮を欠されたり。(尾崎紅葉 金色夜叉 前篇、明治文学全集『尾崎紅葉集』131上

24) (明治三十年)

「気おくれする」以外の用例として、管見に入ったものでは、次の例が古い例である(「興ざめする」の用法と考えられる)。

37 「プリンス頓大学の仏文の教室の男を、おれは知っていたからね」とかれは女にいった。「だから学問の程度についていったんだ、その男ときたらお尻にまで毛が生えてたとおれの女友達はいつてたよ」

「あなたの女友達は淫売なの？」と女が興味をひかれていった。

「社会学の学生で小説を書いているんだ」とかれは笑いに身もだえしながらいった。

「あなたは悪酔いしてるわ」と女が鼻白んでいった。「社会学ってこれじゃ」

女はわいせつな形を白く肥った指でつくり加えて腰をゆすっているらしかったが、それはスタンドの向うのことなのでわからなかった。(大江健三郎 戦いの今日、大江健三郎全作品 2 (新潮社) 116上2) (昭和三十三年)

以下、その他の「気おくれする」以外の用法についても、管見に入った限りでの古い用例を挙げておく。

【A 冷静さや抑制を欠く行為・やりすぎな行為に接して、ついていけないという思いを持つ】

38 さて、ここで名文のなかの名文を引くとしよう。いくら何でも大時代に過ぎるなどと鼻白まずに、丁寧に読んでもらひたい。(丸谷才一 文章読本、中公文庫360・3) (昭和五十二年)

39 【B してほしくないような態度をとられて反感を抱く】
吉牟田刑事は、屈み込み、そのあたりのロープを、仔細に調べてから、ゆっくりと立ち上った。

「どうやら、犯人が、血のついた掌を、ロープにこすりつけたようですね。恐

らく、犯人が、ロープで血を拭いたのでしょ」
「ロープで血を？」

エラーリーは、そこまでいってから、急に噴き出した。

吉牟田刑事は、鼻白み、不快そうに、笑っているエラーリーを見つめた。

「何か、私がおかしいことをいいましたか？」（西村京太郎 名探偵が多すぎる、講談社文庫171・11）〈昭和四十七年〉

「C 選択肢があつて、一つに決められず、迷う」については、25の用例〈昭和四十七年〉、「D 優位に立って、相手を見下すような態度をとる」については、28の用例〈平成二十年〉が、古い用例である。

先に述べたように、Bの用法は、Aの用法を介して、「気おくれする」につながるように思われるが、今のところ、管見に入った限りでは、BよりもAの用例の方が新しい。